

## 第三十回「前田純孝賞」学生短歌コンクール 入賞作品

### 《中高校生の部》

#### 【前田純孝賞】

吐く息に「やはり白い」とつぶやいた言葉はとけてすぐ消えていく

兵庫県新温泉町立夢が丘中学校 三年 小椋 翔生

【選評】 冬の寒い朝、息が白く見える。その一瞬の光景を「やはり白い」とつぶやいた途端に、言葉も

息も溶けて消えてしまう・・・ そんな場面が描かれています。

短歌では、昔から「うつろうもの」を詠むことが大切にされてきました。変わりゆく自然や心の動きを言葉にすることで、長く保とうとしたようです。

この歌もまた、一瞬で消えてしまう息と言葉を短歌にすることで、その儚さをとどめています。

【選者 佐佐木頼綱】

市営バス一番前の一人席ちよつと未来に近い気がする

神奈川県立光陵高等学校 三年 樫下 小春

【選評】 市営バスという身近な乗り物の一番前の一人席に座ることで、視界が開け、まるで未来へと向

かっているような感覚を覚える・・・ そんな発見がやわらかい表現で詠まれた歌です。短

歌の魅力の一つに「身近なものを新しい視点で捉えること」があります。この作品もまた日常の風景に少し違った角度から光を当てることで、新鮮な気づきを生み出しています。いつもの景色の中に、小さな未来を感じさせてくれる、ユニークで親しみやすい作品です。

【選者 佐佐木頼綱】

#### 【準前田純孝賞】

早朝の水面に映るあの光眩しい景色が今日の始まり

兵庫県芦屋市立潮見中学校 二年 山崎 遥翔

風景に私の語彙を加えたら汚れそうだと感嘆詞ひとつ

北海道旭川東高等学校 二年 菅原 幸倫

俺達の最期を告げる笛の音長かったのか短かったのか

兵庫県立加古川東高等学校 一年 宮崎 颯斗

日が昇る朝一番のお気に入り冷たい楽器のあったかい音

千葉県松戸市立栗ヶ沢中学校 二年 川田 理菜

【選者賞】

「大人とは」考える度思春期の羽が一枚抜け落ちていく

神奈川県立光陵高等学校

一年

柳原 萌々子

川底の魚の腹のきらめきが行ってはもどりかつひるがえり

山口県下関市立山の田中学校

二年

江見 寛明

金魚鉢夏の光にゆれながらガラス越しの小さな世界

兵庫県姫路市立城乾中学校

二年

大塚 直輝

夕暮れを使い切るまで走り抜けわたし私を追い越してゆく

東京学芸大学附属高等学校

三年

川上 真央

スタートのピストルまでを待つ瞬間こんなに早い心臓の音

兵庫県神戸市立星和台中学校

二年

正賀 梨帆花

【新温泉町長賞】

なんとなく昔の思い掘り返す過去は苦いよまるで緑茶だ

愛知県立名古屋豊学校

三年

櫻木 鴻志

来週も会いたいなんて言えなくて空っぽになるサイダーの瓶

神奈川県立光陵高等学校

一年

永井 穂果

「おはよう」を言えるかどうか三分前今日はじめての勇気を使うの

クラーク記念国際高等学校姫路キャンパス

一年

松田 実那海

また明日君がつぶやくその意味に寂しさなんて無かったのにな

群馬県前橋市立富士見中学校

一年

酒井 瑠愛

おはようといつもは楽に言えるけど勇気がいるな君のときだけ

兵庫県新温泉町立夢が丘中学校

三年

谷村 にこ

消しカスって試合の後の悔し涙だどれだけこすっても出てくるから

兵庫県立伊丹北高等学校

二年

林 優依

肺胞にあおとみどりを吸い込んで十三の夏に咲いた向日葵

福岡県福岡市立高取中学校

二年

嶋本 香雪

楽しみに待っていた秋のすずしさは口に入れたわたあめのよう

香川県立農業経営高等学校

三年 平田 拓巳

ゆらゆらと揺れる水面が映し出す変化を嫌う私の心

山形県天童市立第二中学校

二年 須藤 成惟

寄せ返す波に行き着く涙のしずくしよっぱい海は誰かの悲しみ

兵庫県立須磨友が丘高等学校

二年 羽田 結菜

### 【新温泉町教育長賞】

愛鳥の羽を集めて画用紙にペタペタ貼るともう一羽飛ぶ

奈良県奈良市立一条高等学校附属中学校

二年 須藤 亜実

制服も残り一年半だって知らないフリしてボタンを留める

神奈川県立光陵高等学校

二年 山本 未生

水気拭き電車に座った身体には塩素のにおいと日焼けが残る

兵庫県立西宮北高等学校

二年 高田 翔太

さようなら肩下伸びた黒髪にこれから私強くなるんだ

兵庫県赤穂市立坂越中学校

二年 宮本 暖加

授業中目を合わせて合図する僕達だけの通信手段

愛知県愛知工業大学名電中学校

二年 竹ノ内 俊河

六月のじつとりした体育館靴が身震いキュキュツと鳴く

兵庫県三木市立三木中学校

三年 前野 雄大

$\pi$  の値尽きぬ想いを重ねても輪になれぬまま無限に巡る

兵庫県立加古川東高等学校

一年 松本 幸太郎

いつからかわたしが私になっている日記を閉じて紅茶が冷める

大阪府立北野高等学校

二年 中山 知優

白球を空高く伸び追い求めわずか五センチとどこかぬ思い

山形県天童市立第二中学校

二年 須藤 玲亜

向日葵の真似して私も上を向く澄んだ青空流れゆく雲

静岡県星陵高等学校

一年 関 三十姫

【神戸新聞社賞】

さあ行くぞジャンプボール今ここにこれで始まる最後の試合

福岡県久米市立高牟礼中学校 二年

平野 希帆

清涼な青がはじけるキラキラと夏の海は炭酸のよう

兵庫県新温泉町立浜坂中学校 二年

岡島 佑華

雨だねと窓を見つめて笑う君嫌いな雨も好きになれそう

広島市立美鈴が丘高等学校 二年

吉田 弥生

攫う波白い砂浜足跡を刻んで消える夏の一切れ

大阪府立工芸高等学校 三年

浦上 彩奈

ひらひらと落ちるいちようを追う君を写真の中にしまっておこう

兵庫県立小野工業高等学校 三年

佐藤 舞花

手話紡ぐ笑いが境界超えていく心を交わす時間をつくる

愛知県立名古屋聾学校 一年

高橋 絆爽璃

さみしいな線香花火落ちたからもうすぐ始まる学校生活

愛知県愛知工業大学名電中学校 二年

水野 駿

星見れば昔の夢を思い出す流れ星ほど光って消えた

愛知県名古屋市立山田中学校 二年

鈴木 悠介

あの窓のひとつひとつに今日があり宵はやさしく街を包んで

群馬県高崎商科大学附属高等学校 二年

福島 環

公園はボールも禁止自販機のジュースの落ちる音のみ響く

渋谷教育学園渋谷高等学校 二年

森口 夕理香

【佳作】

振り向きて君が零した言の葉を今でもひとり抱えて生きる

兵庫県立西宮北高等学校 二年

川上 典夏

トンネルの先に広がる青空を入道雲の白が埋めゆく

兵庫県立西宮北高等学校 二年

井上 十和

夏の海友と飛びこみ冷たさに笑い声まで海に溶けこむ

東京都東京電機大学中学校

三年

林 孝星

青空が海の青さを映すなら白雲は見上げた先に何を映すのか

東京都東京電機大学中学校

三年

久本 菜々

本当はみんなと仲良くしたいのに教室はリアル私は透明人間

兵庫県三田市立八景中学校

二年

月岡 悠奈

そよ風に思わず誘われふりかえる目に映ったのは旅する群青

兵庫県三田市立八景中学校

二年

島野 莉央

毎朝に少しの時間旅に出る自分だけの本の世界へ

兵庫県立加古川東高等学校

一年

川口 結生

自習室止まったシャーペンふと見るスマホあと少しやろう今日はカレーだ

大坂府立夕陽丘高等学校

一年

岡本 昊

てぶくろは君のために着けない派つめたい手と手見れない目と目

大坂府立夕陽丘高等学校

一年

宮下 明日香

教室で早弁大会開催中ちなみに言うときまだ二時間目

大坂府立夕陽丘高等学校

二年

中野 文楓

おはようで始まる朝が好きすぎてさよならだけが今日も言えない

大坂府立夕陽丘高等学校

二年

菊池 真悠子

さわさわと優しくなでる稲の風耳打ちするよ「今が刈りどき」

長野県上伊那農業高等学校

三年

清水 秀実

アキアカネ稲刈り鎌を引く僕の帽子の罨で翼休める

長野県上伊那農業高等学校

三年

瀬瀬 真隆

長旅のつかれのみこむ水面や光を映す琵琶湖は鏡

兵庫県宝塚市立宝塚中学校

二年

長瀬 碧

石をける一直線には転がらない川に落ちても泳いでやるさ

兵庫県宝塚市立宝塚中学校

二年

村岡 咲季

友達と語らうその時大好きだ門限なんてとつくに過ぎてる

兵庫県立神戸甲北高等学校

二年

前田 叶恵

朝露を絡めて光る蜘蛛の城壊さないようそーつとくぐる

兵庫県立神戸甲北高等学校

二年

豊田 有沙

親友と行く一度っきりの薩摩旅心のカメラ回し続けた

大阪府立泉北高等学校

二年

曾根 毬羽

シャッターを落とした瞬間この空間そつと全てがフレームの一コマ

大阪府立泉北高等学校

三年

加島 凜乃

あの人の目は輝いてビー玉よこちらに転んで来てくれないか

大阪府立泉北高等学校

三年

岩本 結衣

音が止む眩しいほどの雨上がり夕焼けが映る坂道を登る

兵庫県立小野工業高等学校

三年

筒井 朝香

顔を上げ見つめた先は金色に染まるふるさとこの先もずっと

兵庫県立小野工業高等学校

三年

玉田 海翔

春の教室ドアを開けると別世界席にすわると新世界

兵庫県新温泉町立浜坂中学校

一年

永井 芽衣

秋の雲ひこうきぐもとまじってるあれはさんまかあれはいわしだ

岐阜県川辺町立川辺中学校

二年

黒岩 夏帆

帰り道友と話して時間経ち気づけば家のすぐそばにいる

岐阜県川辺町立川辺中学校

三年

三輪 大耀

受け継いだ先代からの背番号ずっしり重い手にしたそれは

兵庫県神戸市立兵庫中学校

二年

森脇 瑞希

床をつくボールをつかんで臨む試合真剣な目で真剣な手で

兵庫県神戸市立兵庫中学校

二年

鈴木 悠聖

友達の笑い合う声聞きながら一人眺める窓辺の景色

千葉県松戸市立栗ヶ沢中学校

二年

細田 優芽

葡萄の実口に放れば秋弾けしぶとく残る夏の後味

兵庫県西宮市立西宮東高等学校 三年 岩口 侑聖

星座追い車の窓辺眺めゆく夜空の軌跡夏のものがたり

静岡県静岡学園中学校 二年 宝田 真輝

冬が明け個性豊かな春がくる人それぞれの個性あふれる

兵庫県三田市立長坂中学校 一年 柿原 栞

波の音砂に埋もれた貝探しひとつひとつを心に刻む

兵庫県宍粟市立山崎西中学校 二年 萩原 柚

祭り後の身を寄せ合ったコンビニでパピコ半分肌に当たれり

兵庫県加東市立社中学校 二年 白石 亜美

帰り道いつもと変わらぬ坂道を今日は2人で自転車を引く

愛知県立知立高等学校 三年 山口 妃祢

美術室揺れるカーテン放課後の白いキャンパス何を描こう

山形県天童市立第二中学校 二年 赤松 晃太

夏の空星の数ほど願い事叶わないまま夜風が吹きゆく

鹿児島県長島町立鷹巣中学校 二年 赤崎 聖琉

負けた夜私の声をさえぎって雨がかわりに泣いてるようだ

佐賀県伊万里市立国見中学校 二年 森近 花音

夏の海うっとり見つめる水光と群青色に静まる心

福岡県川崎町立川崎中学校 二年 筒丸 ゆず

ひとしれず春の夜桜咲くならばひっそり私もさいてみようか

兵庫県姫路市立城乾中学校 二年 中川 愛梨

ぽわぽわと飛び立つ綿の子「いってきます」はるか遠くで強く生きてる

山形県酒田市立第一中学校 二年 鈴木 きずな

かじかんだ指ですべらす筆先で音もなく降る雪を描きたい

山形県酒田市立第一中学校 二年 齋藤 優逢

運動会見当たらないなお母さん背伸びしてさがす小さな背中

茨城県常総学院高等学校

二年

布野 和香

十八の淡く切ない夏休み一瞬であり一生である

大阪府立東住吉総合高等学校

三年

前田 龍昇

秋空を流星群が駆け抜ける去る宝石よ我を導け

大阪府立市岡高等学校

一年

田中 怜汰

夏の海波聞きながら涼む日々水面も揺れて心も踊る

兵庫県神戸市立新港橋高等学校

三年

小柳 莉杏

声を出し汗が流れる負けたくない音を響かせシュートを目指す

佐賀県鳥栖市立鳥栖中学校

二年

荒井 咲七

干潮の夏の浜辺の潮だまり鏡のように映る青空

奈良県奈良市立一条高等学校附属中学校

二年

姫野 光央

今日こそはポチポチ打ってまた消して送れずにまだ好きの二文字が

福島県立白河実業高等学校

三年

竹内 杏実

外見れば白一面の冬景色木に積もる雪白き花かな

兵庫県立浜坂高等学校

二年

岡田 唯斗

牧場でいつも楽しくベロも出し優雅にすごす僕の牛たち

大分県竹田市立直入中学校

一年

永富 将斗

悲しき鯨海の彼方に声消えて深き青へと夢を追いゆく

クラーク記念国際高等学校姫路キャンパス

三年

細川 瑞生

みずたまりぽちゃんと落ちる水滴が王様が使う王冠みたい

山口県立岩国商業高等学校定時制東分校

三年

森本 瑠愛

花の道過去の私に別れ告げ未来の私にタスキを繋げ

東京都青稜中学校

三年

杉山 茉央

リレー後の汗光る君の顔を見てすんと何か落ちた気がした

静岡県星陵高等学校

一年

市村 悠実乃

甘い匂い庭に咲くあの金木犀この時期だけの私の特権

石川県立鶴来高等学校

三年

清水 那菜

初舞台余裕なき手に友達の温もり感じ一步踏み出す

奈良県奈良市立一条高校附属中学校

一年

畑山 優花

秋の夕川原の淵でふと思う茜に染まる君の瞳を

愛知県立港特別支援学校

二年

丹羽 崇太

木の葉舞い川面をうめるその下に夕日を浴びてうろこ光る君

福岡県福岡市立高取中学校

二年

村中 紗英

離郷にて気づける愛があるのなら船出の風は背を撫でるかな

東京都武蔵野大学附属千代田高等学院

三年

水野 愛果

父が行き兄が辿ったこの旅路夢駆けるのは金色の馬体

長野県長野ろう学校

二年

飛沢 侑志

踏みしめた腐った土と葉の下に緑の時間がしみこんでいる

東京都立立川国際中等教育学校

二年

吉澤 慧都

被災地の春はいずこにやってくるがれきの下かどろのすきまか

徳島県立脇町高等学校

一年

坂本 梓

おばけさん僕を攫ってお願いねあなたにしかね頼めなくって

東京都立新宿山吹高等学校

二年

関口 巴菜

寒空の朝焼け眺め白い息静かな街に私がひとり

京都府洛星高等学校

二年

山下 裕大

教室という名の夜の水槽でシーラカンスの空目をする

宮城県常盤木学園高等学校

二年

佐藤 日和

青く青くひたすら塗って白足してその先にきつと君が立ってる

東京都共立女子高等学校

二年

山村 柚樹

傘の背に夕日を抱いた雫かな受ける指から溢れる一日

兵庫県立西宮北高等学校

二年

上野山 桜香

台風よ日本横断ツアーなら私も共について行きたい

兵庫県立西宮北高等学校

二年

神田 真帆

サンタさん今年は物はいらないがさみしきのこる朝まくらもと

兵庫県立神戸甲北高等学校

二年

川崎 莉奈

夏休み部活仲間と通う日々日焼けするほど思い出も濃く

兵庫県立神戸甲北高等学校

二年

今泉 柚音

いやだなあ民泊体験行くまでは今となつては第二の故郷

大阪府立泉北高等学校

二年

田村 あみ

変らない白紙のままのこの心君が落とした一滴のインク

大阪府立泉北高等学校

三年

渡部 総太

春疾風落描きまみれの上履きを蹴って空へ空へ旅立つ

大阪府立泉北高等学校

三年

安藤 華

太陽の真っ赤に燃える姿見て私の夏も染まりつつある

大分県日田市立大明中学校

二年

河津 莉桜那

君のため恋の香りの錬り香水私の小さな校則違反

福岡県福岡市立高取中学校

二年

平林 芽依

先見えずあきらめかけた持久走あきらめようかいやどうしよう

福岡県福岡市立高取中学校

二年

石見 圭路

## 《大学生の部》

### 【前田純孝賞】

わずらわしい声を切り捨てるヘッドフォン聴きたい音は私が決める

法政大学

二年 米倉 瞳

### 【選評】

ヘッドホンの音質に取材した一首です。朝の通勤・通学時間の電車に乗ると、じつにくの人がヘッドホンをつけているのにびっくりします。ヘッドホンをして、スマホを見る。男女とも、ここ二、三年、このスタイルが乗客の主流になっているようです。

この一首、下句の「聴きたい音は私が決める」という断定的表現が一首の中核になっています。はつきりした主題を前面にだした、輪郭の明快な作です。

【選者 佐佐木 幸綱】

### 【準前田純孝賞】

東雲に汗の滴る武道場蟬と竹刀の音が木霊す

京都大学

四年 山本 雄太

帰国の日「会いたかった」と言い出せず荷物を持ってくれた父親

国立台湾大学大学院

四年 温 若 喬

### 【選者賞】

図書室を真空にして今だけは校舎がわたしのために建ってる

名古屋大学

四年 安東 諒太郎

祖父母から贈られた本がうずたかく私の底に知として積もる

同志社大学

一年 青木 日向子

アロアロとすれ違う声街角に電話口あり巴里はいそがし

大阪大学大学院

一年 岩田 朝香

### 【新温泉町長賞】

何もない部活帰りの無人駅線路の先に夕日が落ちる

川崎医療短期大学

一年 水本 一花

登校中ふわっと香る金木屋今年の秋の訪れを知る

頌栄短期大学

二年 花田 麻緒

目をひらき飛びおき布団けりとばしかいだん音たて走りだす朝

大阪国際大学

一年 小島 樹里

黄信号祖父と私は止まれども祖母・父進む遺伝の不思議

東京理科大学 二年 瀬山 青央

ブラウンのベロアスカート揺らして歩くイチヨウ並木が私のランウェイ

青山学院大学 三年 鈴木 結衣

【新温泉町教育長賞】

焦がれてたあの子の長いブロンドが黒く染まった大三の夏

青山学院大学 三年 片桐 卯芽

独り言みたいなテレビショッピング見て嘘みたいな笑顔の練習

甲南大学 三年 清水 大稔

白頭の好々爺たる大山の開けた雲井に雪解けを知る

近畿大学 三年 城岸 優汰

ナース服去年はあこがれだったけど今はバイトで共に働く

川崎医療短期大学 一年 小倉 優菜

溜まってるやることリストみてるだけがめんはずっとかたまったまま

大阪国際大学 二年 砂田 真幸

【神戸新聞社賞】

君と居る日々のすべてを押し花に変えて暮らしに栞を挟む

金沢大学 二年 渡邊 美愛

自炊して懐かしくなる家の味共に思い出す家族団らん

大阪国際大学 一年 石倉 芽

愛しげに眼（まなこ）眺める母の手を握りて哀し余命宣告

京都教育大学 一年 白石 奈々

鉛筆の芯は折れても削ればいい私は折れたらどうすればいい

青山学院大学 三年 矢野 皓介

月一でたまにイオンに行くときはフラペチーノと高いドーナツ

新居浜工業高等専門学校 一年 山本 翔太郎